Every Time We Say Goodbye
いつもさよならを

Marilyn Scott
マリリン・スコット

1. いつもさようならを
Every Time We Say Goodbye《C. Porter》(5 : 54)
2. アイ・ゴット・ロスト・イン・ヒズ・アームズ
I Got Lost In His Arms《I. Berlin》(4 : 02)
3. ロンリー・タウン
Lonely Town《L. Bernstein》(5 : 29)
4. ディトゥア・アヘッド
Detour Ahead《H.Ellis, L. Carter, J. Figo》(4 : 30)
5. サン・ホセへの道
Do You Know The Way To San Jose?《B. Bacharach》(4 : 22)
6. ニューヨークの秋
Autumn In New York《V. Duke》(5 : 04)
7. アイ・ラブ・パリ
I Love Paris《C. Porter》(4 : 20)
8. クライ・ミー・ア・リバー
Cry Me A River《A. Hamilton》(5 : 02)
9. キャラバン
Caravan《D. Ellington,. Tizol》(3 : 17)
10. 恋は永遠に
Somewhere《L. Bernstein》(4 : 39)

マリリン・スコット Marilyn Scott《vocal》
サイラス・チェスナット Cyrus Chestnut《piano》
ポール・ボレンバック Paul Bollenback《guitar》
ジェラルド・キャノン Gerald Cannon《bass》
ウィリー・ジョーンズⅢ Willie Jones《drums》
ケン・ペプロフスキー Ken Peplowski《tenor sax & clarinet》

録音：2007年8月27、28、29日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

ⓟⓒ 2008 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York on August 27,28 & 29 , 2007
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Mastered by Venus Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Arrangements : Cyrus Chestnut, Russell Ferrante,
Bill Wysaske, Mitch Forman, John Beasley and Marilyn Scott
Cover Photos : Michael Haber
Designed by Taz

いつもさよならを／マリリン・スコット

マリリン・スコットはＡＯＲ、フュージョンのファンに根強い人気のある西海岸のシンガーで、ジャズ・スタンダードも歌う。アルバム・デビューは1979年で、現在まで11枚のリーダー・アルバムをリリースしている。そんなマリリンが最もジャズに歩み寄った最新作『いつもさよならを』の登場である。ジャズ・ボーカルのファンはマリリンの存在を知り、今までのファンは新しい魅力を発見するアルバムだ。

現代の４ビート、ストレートアヘッド・ジャズを制作方針として人気を博しているヴィーナスレコードのレコーディングだ。ストレートアヘッド・ジャズのミュージシャンを迎え、ジャズ系のスタンダード・ソングを中心にとりあげた。ピアノのサイラス・チェスナット、テナー・サックス＆クラリネットのケン・ペプロウスキーの参加がジャズ・ファンにはうれしいところだ。これまでマリリンのアルバムの大半は、ジョージ・デュークがプロデュースしており、主に西海岸のフュージョン系の人気ミュージシャンと共演している。ジャズとフュージョンは隣接したジャンルだが、両方をこなすミュージシャン、シンガーも少なくない。ジャズ寄りのアルバムが少なかったマリリンにとって、大きなチャレンジになったに違いない。最近ではパティ・オースチンがフュージョンからジャズへ移行したアルバムをリリースして話題を呼んだ。ふだんから両方歌っている人は別にして、ジャンルの移行はパティのような実力のあるシンガーでないと、そうは簡単にいかないものだ。マリリンも同じである。ＡＯＲでもフュージョンでもポップスでもジャズでも、彼女は元々その実力には定評があった。マリリンはこのジャズ・アルバムにおいても実力を十二分に発揮しており個性的で安定感のあるボーカルを聴かせている。バックの演奏スタイルはストレートアヘッド・ジャズがメインで、ポピュラーやボサノバなどもあり、マリリンらしい幅広さをしめすナンバーもある。今までのマリリンのファンも違和感なく楽しめるのではないだろうか。

マリリン・スコットの足跡をふり返っておこう。マリリンは1949年12月21日生まれ。ロサンゼルス近郊のアルタディーナ出身。当初、彼女が好きになったシンガーは、アレサ・フランクリン、ダニー・ハサウェイ、ジャニス・ジョプリン、グラディス・ナイトなどブラッ系が多く、このことは彼女のブルー・アイド・ソウルといえる音楽の形成に大きく影響を与えた。15歳から地元のクラブや学校行事で歌う。芸術奨学金を得て、サンフランシスコの大学へ進学。同時にベイエリアで音楽活動を始めた。そして、タワー・オブ・パワーのリーダー、エミリオ・カスティーヨの仕事に参加したことがきっかけで、ロサンゼルスに移り、スタジオ・セッション・シンガーとして活動する。当時のスタジオ・ワークには、イエロージャケッツ、スパイロ・ジャイラ、ヒロシマ、エタ・ジェイムス、ボビー・ウーマックなどの録音あり、マリリンは当時隆盛した西海岸フュージョンの人気ミュージシャンたちとの人脈をつくる。なかでもイエロージャケッツのラッセル・フェランテ、ジミー・ハスリップは、彼女のリーダー・アルバムに多数参加している。

ソロ・シンガーとしてのデビューは、1977年のシングル「ゴッド・オンリー・ノウズ」。ビーチ・ボーイズのカバー曲だ。79年には『ドリームズ・オブ・トゥモロウ』でアルバム・デビュー。そして、83年のセカンド・アルバム『ウィズアウト・ウォーニング』で大きな注目を浴びた。ギタリスト、シンガーのマイル・センベロがプロデュースを担当、録音にはイエロージャケッツのメンバーやロベン・フォードなどが参加した。この年、センベロの歌った、映画『フラッシュ・ダンス』の収録曲「マニアック」は、全米第１位のヒットを記録している。それからしばらくリーダー作はとだえるが、91年に『スカイ・ダンシング』をリリース、ボビー・コールドウェルとのデュエット曲で話題を呼ぶ。同年、コールドウェルの来日ツアーにも参加した。それ以降は、フュージョン、ジャズ・ファンクの第一人者ジョージ・デュークが主にプロデュースを手がけ、コスタントにリーダー・アルバムを発表している。今回のジャズ・アルバム以前で、最もジャズに歩み寄ったのは2004年のアルバム『ナイトキャップ』で、スタンダード・ソングを取りあげてジャジーなボーカルを聴かせている。マリリンのアルバムはコンテンポラリー・ジャズ(フュージョン)、ジャズ、ポップスなどのチャートにランクインしているが、チャートのジャンルを見ても彼女の多彩な音楽性を物語っている。

最近、超ジャンル志向のシンガーがジャズ・レーベルからデビューするケースが増えている。ジャズ・シンガーがジャンル超えたアルバムをリリースすることも多い。そのなかには、過去のどのジャンルにも収まらない、新しい音楽の可能性を広げるシンガーもいる。興味深いのは、マリリン・スコットがこのアルバム『いつもさよならを』でみせるボーカルに、そんな先進性を感じさせるところが少なくないことだ。それはそのままマリリンの個性でもあるが、彼女が新しい音楽を求めながら自分の歌を洗練させる姿勢をいつも持ち続けていることをしめしていると思われる。肩の力を抜いた歌い方、コンテンポラリーな彼女流のアプローチやフレージングなどが個性的でアルバムはジャズ・ボーカルのファンだけではなく、新しいファンにもアピールする仕上がりをみせている。

参加メンバーを紹介しておこう。サイラス・チェスナットはジャズ・ファンにはおなじみの存在。ゴスペル、ソウルも得意な正統派のピアニストだ。90年代の初めから第一線で活躍。日本制作によるマンハッタン・トリニティのピアニストとしても知られる。ケン・ペプロウスキーはジャズ・クラリネットの第一人者。クラリネットはスイング・ジャズのイメージが強い楽器だが、彼はモダンな要素もとりいれた演奏を聴かせる。また、テー・サックスの名手でもあり、最近ヴィーナスレコードに録音したアルバムでは、クラリネットとテナーの両方で高い人気と評価を獲得している。ギターのポール・ボレンバックはジョーイ・デフランセスコ、ヒューストン・パーソン、マーク・マーフィーなど、ベースのジェラルド・キャノンはロイ・ハーグローブ、ラルフ・ピーターソン、アンソニー・ウォンジーなど、ドラムのウィリー・ジョーンズⅢはホレス・シルバー、フィル・ウッズ、グラント・スチュワートなどのアルバムに参加している、いずれもストレートアヘッド・ジャズの名手たち。

＊いつもさよならを　コール・ポーターの作詞作曲。原題は「Every Time We Say Goodbye」で、“いつもさよならをいうたびに落ち込んでしまう”という別れのつらさを歌ったスロー・バラードの名曲。マリリン・スコットは情感をたたえた歌唱で魅せる。ケン・ペプロウスキーのサブトーンを使った演奏も渋い。

＊アイ・ゴット・ロスト・イン・ヒズ・アームズ　アービング・バーリンの作詞作曲。ミュージカル『アニーよ銃をとれ』(1946年)のために書かれた。ローズマリー・クルーニー、リー・ワイリーなカバーはほとんどボーカルだ。オリジナルはスロー・ナンバーだが、さまざまなアレンジで歌われる。ここではラテン・タッチの軽快なアレンジで、ポール・ボレンバックのギターがフィーチャーされる。

＊ロンリー・タウン　「ニューヨーク、ニューヨーク」などが生まれたミュージカル『オン・ザ・タウン』(1944年)のナンバー。作曲はレナード・バーンスタイン、作詞はベティ・カムデンとアドルフ・グリーンの共作。マリリンは哀感をたたえた歌で、この曲の愛と孤独を綴る。

＊ディトゥア・アヘッド　ジャズ・ギタリストのハーブ・エリスがピアノのルー・カーター、ベースのジョン・フリゴと共作した1948年出版のジャズ・スタンダード。作者の３人は当時「ザ・ソフト・ウインズ」というグループで活動していた。「恋の回り道」という邦題がある。ボーカル・バージョンは少ない曲だが、この曲の選択やこなれたフレージングにマリリンの優れたジャズ・センスをうかがわせる。

＊サン・ホセへの道　バート・バカラック作曲のボサノバ・タッチのナンバーで、作詞はハル・デビッド。ディオンヌ・ワーウィックが歌って1968年に大ヒットした。サン・ホセ（San Jose）はコスタリカの首都名でもあるが、これはカリフォルニア州西部にある都市名。サンノゼ、サノゼなどの言い方もある。マリリンの発音もサノゼだ。ロサンゼルスでの夢やぶれ、故郷のサン・ホセへ帰りたいと歌われる切ないナンバーだ。

＊ニューヨークの秋　バーノン・デュークが1934年に作詞作曲したこの曲は、ニューヨークを題材にした最も有名なジャズ系のスタンダード・ソング。52年にチャーリー・パーカーが録音した頃からモダン・ジャズの録音が増えた。ここでもマリリンはリラックした歌い回しをみせている。

＊アイ・ラブ・パリ　一時期パリに住み、パリ社交界の名士としても鳴らしたコール・ポーターが、ミージカル『カン・カン』(1933年)でパリへのあこがれを描いたナンバー。ボーカルも共演者もスインギーなジャズらしい熱演バージョンだ。

＊クライ・ミー・ア・リバー　セクシーなジャズ・シンガーとして大人気を博したジュリー・ロンドンの大ヒット曲。彼女の友人、アーサー・ハミルトンが作詞作曲したブルー・バラードだ。マリリンは言葉のひとつひとつをかみしめるような歌い方をみせる。ケン・ペプロウスキーのアドリブも聴きもの。

＊キャラバン　デューク・エリントンとエリントン楽団のトロンボーン奏者ファン・ティゾール1937年に共作したラテン・タッチのナンバー。ジャズの大人気スタンダードだ。

＊恋は永遠に　これもレナード・バーンスタインの作曲。バーンスタインはニューヨーク・フィルの指揮者として有名だが、ブロードウェイ・ミュージカルでも活躍した。これは映画化で世的に有名になったミュージカル『ウエスト・サイド物語』(1957年)中のナンバー。原題は「サムホエア」。サビで熱唱する歌い方をよくみかける曲だが、マリリンは肩の力を抜いたボーカルを聴かせる。

(高井信成)